

「二二八平安運動」の提唱と台湾社会における和解

—蘇南洲・彭海瑩インタビュー記録—

菅 野 敦 志

はじめに—調査目的と概要—

本資料は、台湾の二・二八事件（以下、組織・団体などの固有名詞で用いられる場合には中国語原文の二二八）をめぐる和解・補償運動において中心的な役割を果たした蘇南洲（以下、すべての人物名は敬称略）のインタビュー記録である。二・二八事件とは、日本の敗戦によって台湾が中華民国の一省となった2年後の1947年2月27日に発端となる事件が勃発し、28日から全島へ急拡大をみせた反政府大衆暴動に対して、国民政府軍が1万8000人から2万8000人の住民を虐殺したとされる台湾現代史上最大の衝突事件である。

二・二八事件は38年続いた戒厳令下ではタブーであり、被害者家族が声をあげることができたのは1987年の戒厳令解除以後のことであった。そこで社会／市民運動および運動家（特にキリスト教徒）が果たした役割は大きく、なかでもキーパーソンとなったのが蘇南洲であった。蘇は雅歌出版社というキリスト教系出版社の社長かつ社会運動家であった。1991年には、蘇の自宅地下で二・二八事件の初の被害者団体である「二二八關懷聯合会」の前身となる組織が誕生した。同会には、近代台湾を代表するエリートとして知られる犠牲者・林茂生の子息であり、精神医学の世界的権威であった林宗義が被害者遺族の代表として就任したが、蘇は林の特別補佐として彼を支え続けた。林宗義は1990年から91年にかけて李登輝総統に五つの要求（真相公開、謝罪、賠償、記念碑建立、基金会設置）を提出し、政府機関との困難な交渉を経て、そのほとんどが1995年までに実現した。

二・二八事件に対する異議申し立ては、当初は政治・言論の自由と「台湾独立」を主張して中国国民党（以下、国民党）に抗議・焼身自殺した鄭南榕を発起人とする「二二八和平日促進会」により開始した。同団体は〈二二八公義和平運動〉の名称を用いたが、それはやがて〈二二八平反運動〉に代替され、2000年代の民主進歩党（以下、民進党）による政権交代以降は同呼称が使用されている。〈平反〉は中国語で「名誉回復」を意味すると同時に、「正義の回復」を強調する。一方で、蘇は〈平反運動〉ではなく、〈平安運動〉の語にこだわった。〈平反〉と〈平安〉は一文字違いでしかない。だが、蘇南洲は台湾社会が対立と憎しみを克服し、「和解」を達成するには、〈平安〉による癒しが必要であり、その一文字の違いこそが重要であるとした。

林宗義の片腕であった蘇南洲は、対政府交渉の全過程を知る数少ない人物であった。筆者は、文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究（研究領域提案型）「和解学の創成」

(研究代表者：浅野豊美)の計画研究の一つである「市民による歴史問題の和解をめぐる活動とその可能性についての研究」(課題番号：17H06338、研究代表者：外村大)の研究分担者として、台湾の二・二八事件をめぐる市民運動と和解について調査を進めたが、その過程で薛化元・二二八事件記念基金会董事長の紹介により、蘇南洲夫妻および子女の蘇昱璇(国立政治大学教員)と面識を得ることができた。



図1 蘇南洲(左)と筆者(右)2019年11月22日、台北市内の蘇南洲自宅にて(蘇昱璇提供)

蘇南洲の思想と行動に関わる詳細に関して

は、キリスト教徒および台湾人犠牲者家族団体が果たした役割について検討を行った筆者による別稿を参照されたいが¹、本インタビュー記録は2019年11月22日に蘇南洲および夫人の彭海瑩から行い、両者から刊行の許可を得た聞き取りの記録である(場所は台北市内の蘇南洲自宅にて実施、原文は中国語)。

だが、聞き取りから3カ月後の2020年2月27日に蘇南洲は突如他界した。その日は、奇しくも73年前に二・二八事件が発生した同日であった。本インタビューは台湾社会の分断を乗り越えるべく、キリスト教に基づく社会／市民運動の立場から行動した蘇南洲の歩みの回顧であり、生前の蘇が残した貴重な証言として位置づけられるものである。なお、本稿は蘇南洲のインタビューが中心ではあるが、夫人である彭海瑩インタビュー記録も補足資料として掲載している。

本稿の日本語訳は著者によるものであり、文中で括弧書きがある部分は筆者による補足説明とし(〈〉内は原文の中国語表記)、中国語の〈紀念〉は「記念」と統一表記する。

1. 「二二八平安礼拝」(1990年12月8日)

蘇南洲：

以前、ある牧師は私に、「二二八被害者家族とどのようにして打ち解けることができるのか」と聞きました。その問いに対して私は、こう答えました。「難しくはありません。この八文字〈設身处地、感同身受〉[相手の立場に寄り添い、相手の気持ちをこの身で受け止める]だけあれば。」〈設身处地〉は、「私はあなたの立場に立ち、そしてあなたの気持ちを思う」ということです。違う宗教ではわかりませんが、歴史のなかのアクターとして、少なくともキリスト教ではこのようなことができるのです。なぜなら、神は我々の立場に立ち、我々と共に困難な道を歩かせるためにキリストをこの世に遣わしたからであり、私はキリスト教の精神はこうした時にこそ用いられると考えるからです。実際に、和解には一つの大きな問題があります。それは“面子”という問題です。なぜなら、謝罪は“面子”を失わせるように

見えるからです。

私は「二二八平反運動」〔訳者注：ここで用いられている中国語の〈平反〉は、個人の「名誉回復」という意味ではなく、被抑圧側による「政治的正義の回復」という意味で用いられており、以降もこの意味で使用される〕の用語にはあまり賛成していません。なぜなら、〈平反〉という二文字には、誰かが間違っているから正す、という意味合いが含まれているからです。しかし、間違っているのは誰なのでしょう？

それに対して私は、「平安運動」の語を用いています。平安とは“シャローム” (shalom) であり、平和運動はシャローム運動と呼べるでしょう。我々は二二八の悲劇を過去のものとし、再び発生させることがあってはなりません。そのために、私はずっとキリスト教の視点から対処してきました。“罪人が正しき道を歩むよう助ける”、それが我々の有する態度なのです。

すべての人は神が創造されました。すべての子どもは父親と母親によって生を授かりました。父親と母親は、子どもがどのような道を歩めば喜んでくれるのでしょうか。そのように考えると、我々も過ちを犯した政府を助け、過ちを犯した社会を助け、神が喜んでくれる道を歩むべきなのです。ですから、私は「平安」の文字を用いるのです。

1990年12月、我々はクリスマスの前に「二二八平安礼拝」を執り行いました。説教者は2人でした。1人は、蒋介石の牧師であり、もう1人は李登輝の牧師でした。蒋介石の牧師は台湾語で説教し、一方の李登輝の牧師是北京語で説教しましたが、どちらも二二八事件について話をしました。ここには、〈設身处地〉、すなわち、私は相手の立場に立ち、あなたが私の立場に立って考えるという姿を見ることができました。この時から、“真実を探し、真相を追究しよう”という動きが始まることとなったのです。

2. 真相究明、謝罪、賠償、記念碑建立

国民党は1992年から真相の一部を明らかにするようになりました。真相が明らかになった後、次に来るべきは謝罪です。そのため、国民党主席であり、また総統であった李登輝がこうした国家による謝罪を行うことは不可避でした。

私は李登輝が非常に誠意をもって対応したと感じました。それはなぜだと思いますか？当初から、彼は「私がどのように謝罪をしたならばあなた方は受け入れることができますか」と言っていました。そのため、彼の謝罪文の草稿は私が手伝って仕上げたものでした。私が書いた文章は、どちらかといえばオブラートに包んだような表現でした。しかし、草稿が彼の手に渡ると、彼は私が書いた婉曲した表現を用いることなく、直接過ちを認めたのです。その遠まわしな表現は、私が書いたものです。それは、彼〔李登輝〕に多くのプレッシャーがかかるであろうことを懸念したからです。だからこそ、当時の謝罪文の草稿には、「風吹かば、草ふせる」〈風行草偃〉という表現を入れていました。ところが、結果的に彼はその部分を削除し、直接謝罪の言葉を述べたのです。このことから、私は彼の謝罪が誠意のこ

もったものであることをはっきりと理解することができました。

1995年に謝罪を述べた後、李総統は二つの事を行いました。口先で謝罪するだけでは十分ではなく、最も直接的〔な行動〕となってくるのが賠償です。その後、社会に対して、そして歴史に対して行われるべきが、記念碑の建立でした。つまり、真相を明らかにし、謝罪・賠償をし、記念碑の建立が行われたのです。

3. 「二二八家族会」から「二二八關懷聯合会」へ

「二二八關懷聯合会」が結成される前には、「二二八家族会」〈二二八家属団契〉という団体が存在していました。この「二二八家族会」は私の家で結成されたもので、約10名の構成員でしたが、会に参加したばかりの彼らはとても恐れを感じていました。会が始まった日は、蔣経国がこの世を去った、まさにその当日〔引用者注：蔣経国は1988年1月13日に死去、会発足はそれから3年後の同日である1991年1月13日〕でした。我々は、2週間に1回この集会を行うことを決めましたが、その後、林宗義〔訳者注：二二八事件で殺された台湾を代表する知識人・林茂生の息子で、戦後はカナダに移住〕が台湾に戻った時にこの会に参加しました。彼はこの会をとてきに入り、後にこの会を拡大することにしました。なぜなら、〈団契〉（フェローシップ）は確かに教会の団体であるとはいえ、その垣根を越えた、互いを思い合う団体でもあったからです。

我々が家族会を組織した時、もし他者を思いやることができれば、自身の痛みを忘れることができ、自身が抱える傷から自由になることができれば、他者に対しても関心を寄せることができるようになる、と考えていました。そうしたことから、他者を思いやる仕事を進めるためには、二二八事件の犠牲者家族は自身のことだけに関心を寄せるだけでは十分ではなく、むしろ、自ら望んで他者に対して関心を寄せることが必要となってくるのです。

「二二八家族会」は〔引用者注：1991年〕1月に開始しましたが、2カ月を経た後、3月に李登輝と会いました。李総統は、真相究明、謝罪、賠償、記念碑建立、そして基金会設置といった我々の要求にすべて応えてくれました。我々は組織の拡大を始めることとなり、およそ半年かけて、8月には「二二八關懷聯合会」が成立しました。

同会成立の過程において、我々はいくつかの原則を確認していきました。一つ目は、家族の主体性です。我々はまず、そうした主体性をしっかりと把握しておく必要があります。我々は政治運動を行っているわけではありません。「二二八平反運動」と言った場合、そこには政治的ニュアンスが含まれます。しかし、もし「二二八平安運動」と言った場合には、それはどちらかといえば宗教的なニュアンスを含むものになります。実際、私はこれをソフト・エンカウンタリング〈soft encountering、柔性抗衡〉〔訳者注：非暴力の柔らかな方法でもって相手に立ち向かう戦略〕と称しています。我々は決して受動的でも、国民党の善意を待つだけの存在でもなく、そこではある種の〔相手や状況に応じた〕「しなやかさ」をもって対処していくのです。

4. 罪人が正しき道を歩むよう助ける

我々は相手の善意を待つものではありません。主動的でありながら、主体性をもつと同時に、主導性を有するのです。我々は、罪人が正しき道を歩むよう助けるのであり、政府がどのようにすべきかについて、我々が政府に教えるのです。ですから、もし謝罪ができないのであれば、どのように謝罪すべきかを教えます。そして、最後が主場性です。

例えば、我々が行った〈等待礼拝〉(waiting service)では、我々は「幸せの黄色いリボン」(Tie a Yellow Ribbon on the Old Oak Tree)の歌を用いました。これは、家族の帰りを待ち続けていることを伝えるものですが、我々は国民党の人々をあらゆる活動に招待していきました。彼らがやって来れば、それ以降、彼らは我々が主導する場に入ることになるのです。私はトロツキーやカミュの本も読みました。フランスの存在主義の哲学者のやり方であれば、我々は決して相手側の場に身を置き、相手のゲームに身を預けて主導されることがあってはいけません。

そうしたことから、我々は〈平安礼拝〉、〈等待礼拝〉、〈清明礼拝〉を行いました。〈清明礼拝〉は、清明節に実施した礼拝です。台湾では4月に墓掃除を行います。ところが、二二八事件の犠牲者家族には掃除する墓がないのです。なぜなら、あなた方〔国民党政府〕が私の父親を連れ去り、帰ってこないからです。これではいったいどこに行けば墓掃除をすることができるのでしょうか？ そして、5月には母の日に音楽会を開催しました。なぜ音楽会を開催したのでしょうか？ それは、苦しみのなかにある母親を慰めるためです。このように、我々は手順を踏んで、一步また一步と、テンポをとりながら実施していきました。それらを、1年に1回開催すれば済むものにはしなかったのです。

社会運動に従事する場合には、“勢い”(momentum)が必要になってきます。もしそれが1年に1回でしかないなら、「去年どうであったか」など、人々はすぐに忘れてしまいます。そこでは勢いを保ち続けることが必須であり、手順を踏みながら、テンポ良く推し進めていく必要があるのです。第一にすべきは、社会運動のディスコース(論述／言説)を構築することです。第二に、そのディスコースを他の多くの人々に知ってもらうことです。よって、社会運動の理念を伝え広めることが必要になってきます。次に、社会的資源を集約させうえて、社会の人心を一つに束ねることが求められます。

実は、私に実働部隊のような存在はいなかったのですが、国民党側は、私が千軍万馬の強者であると思いついていた節がありました。台湾では七七49日〈七七49天〉、つまり、7週間後に死者の霊魂が帰ってくると昔から考えられています。ですが、私たちは死者の霊魂を待つことすらできません。それは当然のことです。なぜなら、すでにもう40数年もの歳月が過ぎてしまっているのですから。それで、我々は死者に向けて風船を飛ばすことにしました。それは、「無言で天に問う」〈無語問蒼天、Speechless to question Heaven〉という意味表示でもありました。

この行動に対して、国民党は警察の鎮圧部隊を派遣しました。ところが、その隊長からは、

「戻って報告書を作成して上に提出しておきます。我々も上から命じられたから来たのであり、あなた方に暴力を働きたくはないのです。」と言われ、私は逆に感謝されたのです。私は、「それでは報告書には何と書くのですか？」と聞きました。すると、「あなた方は風船を飛ばしていて、前を通る子どもたちが皆あなた方の風船を手にはしているだけですよね。」との返答でした。

その時、我々は教会の前で風船を空に飛ばしていましたが、教会の隣にはマクドナルドがありました。多くの子どもたちがマクドナルドに来ていましたが、それらすべての子どもたちの手に風船が握られていたのです。「お母さん、あそこに風船があるよ、私にもちょうだい！」と言って、子どもたちがねだるので、母親の方から我々に風船を求めに来るのです。その結果、沿道にいる子どもたちは皆、我々の風船を手握り、とても嬉しそうでした。警察も、そうした子どもたちの手から風船を奪うことはできませんでした。つまり、「わが部隊の鎮圧装備は十分であったが、それをもってしても児童の手から風船を没収することは不可能であった。」と報告することにしたのでしょう。このようにして、その場にいる全員にとってハッピーエンドとなる結末を迎えることができたのです。

5. 主体性、主動性、主導性、主場性、主僕性

一つ、そしてまた一つと、我々は二二八事件関連イベントを毎月実施していきました。1992年には、国立音楽ホール〈国家音楽庁〉で「二二八音楽会」を開催し、総統や行政院長〔首相〕も来場しました。我々が主催したイベントにはすべて彼らを招待しました。彼らが来たならば、私がホスト〈主人〉になります。そこで、我々の有すべき主体性、主動性、主導性、主場性には、それに続いて最後に主僕性と称するものが来るのです。それは、あなたは公僕であり、私こそが主人である、ということの意味します。

我々はこれまで、「あなた方に抗議する」といった行動は一切取ってきませんでした。私が考えるに、我々が主人であれば、あなたこそが僕なのであり、どうして主人が僕のドアの前に行って抗議できましょう？ もしあなたが僕であるなら、私が手伝い、教える側なのです。もしあなたができないのであれば、叱ってクビにすることもできます。私こそが、それらをすべて行うことのできる立場にあるのです。

よって、こうした状況下において、我々は1990年から始め、1991年に一連の活動を進めました。実は、ここには一つの大きな思惑が込められていました。それは、社会的な緊張を緩和させる効果です。なぜなら、私が小さいころから馴染み深い、敬愛する先輩を我々の活動に誘ったりしたのですが、彼は「二二八事件にかかわったら問題になる」と言って警戒していました。ですが、もし一度目がセーフ（安全）、二度目もセーフで、毎回セーフならどうでしょう。安全が確保されていれば、何でも実施することができます。ただ、安全は絶対に必要です。いかなる損害や障害が生じていいけません。最近の状況でいえば、〔逃亡犯条例反対から発展した反政府デモで〕香港の若者たちが遺書を書いて家を出る、ということが

ありました。彼らはとても勇敢です。ですが、勇敢であること以外にも、知恵を生かすことができるはずです。そこにはどのような戦略があるのでしょうか？

その点でいえば、私は林懷民〔訳者注：世界的に著名な台湾の舞踏家〕を招き、彼のダンス・グループ〈雲門舞集〉に来てもらい、〔二二八事件犠牲者家族を題材とした〕「家族合唱」というモダンダンスの作品を創作してもらったことがあります。また同様に、音楽家の蕭泰然に《1947序曲》という交響曲を作曲してもらったこともあります。

6. 二二八記念碑

1990年12月8日、我々は「二二八平安礼拝」を実施しました。その後、1992年2月には二二八の音楽会を行い、3月には記念碑建立の作業に着手しました。記念碑建立は一つのプラットフォームであり、記念碑建立の開始とその完成は、国民党から謝罪を引き出すためのプラットフォームでした。そのため、記念碑が完成した時に李登輝が謝罪を行ったのです。なぜ記念碑建立を新公園でやろうと思ったのか。新公園にはもともと銅像が設置されていました。それは日本統治時代の後藤新平〔台湾総督府民政長官〕の銅像でした。国民党は戦後にその銅像を撤去して、その場所に鐘を設置したのです。我々は、その鐘のある場所に、代わりに二二八の記念碑を建立することを求めたのです。

その二二八の記念碑をデザインした設計者は、かつて党外運動〔訳者注：反体制・反国民党運動〕にかかわっていた人物でした。1995年の2月に李登輝は謝罪を行い、そして、1995年12月に二二八基金会〔正式名称：二二八事件紀念基金会〕が活動を開始させたのでした。

私は二二八に関係するすべての委員会で副委員長（vice president）を務め、「二二八關懷聯合会」でも林宗義の特別補佐であったことから、この身分でもってすべてのプロセスに参加していました。本来、二二八記念碑の設置場所には7カ所の候補がありました。国民党政府は7カ所の場所を我々に示していたのです。ですが、我々はそれらの7カ所には設置しない、ただこの1カ所だけが欲しい、と伝えました。その後、〔我々の要求は〕李登輝総統の同意を得ることができましたが、このやり取りが原因で元々の記念碑委員会の世話人だった方は辞職されました。これはおよそ1993年あたりのことでした。場所が決定した後、次は記念碑のデザインコンペが続きました。このコンペにもかなり長い時間がかかりました。そして、コンペが完了して、ようやく記念碑の建立ができるようになったのです。

7. 二二八事件記念基金会

基金会は1995年12月に成立しました。私はこの基金会には創設理事として加わり、1998年まで務めました。始まったばかりの時はとても大変でした。1996年2月28日の時には、国民党政府は「二二八慶祝大会」という計画書を送付してきました。これに対して、私は「いったい何を祝うというのか？」と思わず口にしました。こうした彼らのやり方というの

は、これまでずっと、国慶〔建国記念〕慶祝大会、元旦慶祝大会などを執り行ってきたことから、ただ同じようにやろうとしていただけだったのです。基金会も、こうしたやり方を踏襲しようとしていて、まったくセンスのかけらもありませんでした。いったい何を慶祝するのでしょうか？ 2万人を殺したことを祝おうとでもいうのでしょうか？

当時はまだ賠償とは言えませんでした。補償、と言わなければならなかったのです。なぜなら、賠償には法律上の責任が伴うように聞こえるからです。そのため、彼らはこの法律用語を避け、補償の語を用いました。この賠償あるいは補償については、基金会が執り行いました。死亡に対する補償は600万元で、申請が認められたのは2000人以上となりました。一部の人は、「え、2万人以上が死んだのではなかったのか？」と言ったりもしていました。ですが、事件からもう50年近くも経過し、多くの犠牲者はまだ少年でもありました。彼らの父親や母親、兄弟もすでに亡くなってしまっている場合があります。ある人はニュージーランド、オーストラリア、アメリカ、日本などの国外や中国に逃れましたが、彼らも補償の対象から漏れたりしたことでしょう。拷問されて殺されたり、監獄に収監されたりした人たちが補償や賠償を得ることができたのです。

およそ600万に1000をかければ、だいたい60億から7、80億になります。そのため、基金会には賠償の担当グループが設置されてこの業務にあたっていました。賠償担当グループが会議を行い、こうした結果を理事会に報告して承認されたのでした。

この業務は金銭に関係する事項であったため、私は直接には関わりませんでした。他には、犠牲者家族のもとを訪問したりもしました。それから、一つの仕事としては、二二八記念碑が建立されることになったのですが、記念碑には碑文が必要になるため、我々は合計563文字からなる碑文を選定しました。8名の学者が30数回会議を開催しました。1回の会議ではわずかに20数文字しか決めることができず、その20数文字を決めるだけのために午後をすべて使ったりもしました。1996年から97年をかけて確定させ、その後ようやく完成をみることができました。

続いては、今日の基金会の理事は歴史学者にオーラルヒストリー〈口述歴史〉を採集させたりしていますが、それらで語られているのは1947年の出来事です。しかし、1990年、91年、92年、そこから2000年にかけて発生した出来事に関する記録化について、これまで誰も私を訪ねてくることはありませんでした。なので、今のところ、あなた〔菅野〕が世界でただ1人〔二二八平安運動の記録と保存を目的として訪ねてきた歴史学者〕です。私の倉庫には、まだ多くの史料が保存されています。いくつかに関しては、すでに〔雅歌出版社が発行する雑誌『曠野』誌上で〕二二八平安運動について一連の文章を書きましたし、1990年からのおよその状況についていえば、その一冊〔書籍『平安、二二八』〕が最初のものとなります。

先ほど、私は台湾における白色テロの犠牲者であり、また生存者であることをあなたに伝えました。私は1979年の時に台湾の警備総司令部に捕えられました。自由になってからは、兵役を務めました。兵役を終えた後、本来は国外に出て留学するつもりだったのですが、結局出国は許可されませんでした。それだけでなく、台湾で仕事に就くこともままなりません

でした。警備総司令部は、私が就職した勤め先に対し、私の行動に関する情報提供を求めるなどの干渉をしてきたのです。警備総司令部は、戒厳令下における最も重要な機構です。

こうしたことから、私はこの40年来、勤め先からのお給料は2年ほどしかもらっていません。これは、私に収入がなかったということではありません。ある仕事は支払いがありました、ある仕事はボランティアでした。例えば、1993年から98年まで携わった「二二八平安運動」については、ある特定の長い期間は無償による活動でした。ですが、人というのは金銭的な代価が支払われるから仕事をする、というわけではない。そうですね？ あなたがそこに価値と意義を見出すからこそ、その仕事に取り組むのです。

8. 二二八事件と社会運動・政治運動

一部の方々は、二二八事件を用いて国民党に対する抗議を進めてきました。それは果たして、二二八事件を心から気にかけているということなのか、それともただ利用しているだけなのでしょうか？ あなたの目的が国民党に反対することなのか、それとも、あなたの目的が二二八犠牲者家族のためを思っている行動であるのか？ 両者は同じではありません。

かつて、中国の毛沢東は、蒋介石の独裁に反対していたので、彼は反独裁のはずでした。しかし、毛が蔣を権力の座から引きずり下ろしてからというもの、毛は蒋介石よりも独裁的になり、しかも、反独裁の立場をとる人々に対していかに対処すべきかを良く理解する独裁者となっていました。こうしたことから、自由民主を語ることは、そうした人々がまだその権力を手に入れていないために、そのために自由民主を主張するということがあります。実は、その目的は自由民主のためというわけでは決してなく、むしろ権力を奪うためだったりするのです。多くの社会において、自由民主は権力闘争のために必要なものであり、その権力を手中に収めた後、今度は一転して自由民主を求める人々を攻撃するようになるのです。

もしあなたがヤクザの人間と交渉しなければいけなくなったとしましょう。彼は刃物を持っています。あなたは同じように刃物を持っていますか？ 相手はあなたよりも力があります。それを承知のうえで、あなたは彼と筋肉対決ができるのでしょうか？ いったい、そうした相手に対してどのように立ち向かうことができるのでしょうか？ もしあなたが彼の面の皮をはがそうと頑張ったとすれば、彼は黙っておかないでしょう。政府も同様です。政府も人間なのです。警察に対して武勇的に攻撃を行ったところで、警察に勝てる見込みはあるのでしょうか？

たとえば、1枚のドアが目の前にあり、行く手を遮っているとします。あなたはここを通りたい、そうですね？ そしたら、あなたはどうしたいですか？ あなたは私のポケットから鍵を奪ってドアを開けて中に入りますか？ それとも、あなたは私が自分でそのドアを開け、あなたを中に迎え入れることを望みますか？ 私のやり方というのは、国民党に自分で鍵を開けさせて、そして私を中に入らせる方法であったのです。

もしあなたが抗争をするなら、あなたは相手のドアを叩き破りますか、それとも、相手のポケットに手を突っ込んで鍵を奪い、その奪った鍵で自分がドアを開けますか？ 罪人が正しき道を歩むよう助けることを我々が行うのは、良いことではないでしょうか？ 我々がケンカをして、神様はお喜びになるのでしょうか？ あなたは神の創造物であり、私も神によって造られました。その2人の神の子がケンカをするのを見て、神様は嬉しく思われるのでしょうか？

我々は審判を下す側ではありません。人は審判できる側にはないのです。もし国民党政府が悪者であると言わなければならないのなら、数千年にわたって、政府というのはすべてこのようなものであり続けたのです。そうした時に必要なのは、相手を抹殺することではなく、相手と一緒にあって解決の道を探ることなのです。

9. 二二八「平安」運動は「平反」運動ではない

私はキリスト教徒、クリスチャンです。そのため、これは「平安」運動であり、〈平反〉ではありません。我々は、誰かに反したいということではなく、これらの〔訳者注：事件の被害者を始めとした苦難のなかにある〕人々に平安をもたらしたいだけなのです。私が望むのは、この土地の人々に平安をもたらすこと、ただそれだけです。そして、もし平安が訪れないようなことがまだ残っているとすれば、それに対処し、問題が過ぎ去るようにすれば、それでいいですね。私は誰に対して反しないといけないのでしょうか？ 私は誰に対しても反すべきことはないのです。

なぜ彼はあなたに対して反すべきという態度をとるのか？ それは、彼は憎しみを抱いているからであり、「恨み」がこの胸のなかにあるからなのです。だからこそ、我々にとって必要なのは〈平反〉ではなく、「平安」なのです。少なくとも、あなた方は私が〈平反〉運動を進めていると誤解して言わないでください。それ以前のことはよくわかりませんが、1990年に始まり、2000年までにいたる一連の流れは、二二八「平安」運動なのです。このことをいくら言っても理解してもらえない方々がいるのです。それに対して、私も徐々に気力を失っていき、「理解してもらえないなら仕方がない」と諦めてしまいました。

こうした考え方から、我々が運動で一貫して用いたのは、「ソフト・エンカウンターリング」〈柔性抗衡〉です。抗争ではありません。ところが、一部には我々がこれまで進めてきたことが抗争であると勘違いしている人もいます。でも、いったい誰に抗うのでしょうか？ 抗ってなどいないのです。私は李登輝に対して敵対してきたのでしょうか？ そんなことはありません。我々は、「平和創造の計画者（peace making planner）」なのです。私は国民党に対して抗争が必要なのではなく、平和創造のパートナーになりたいのです。我々のパートナーシップは良好です。しかし、もしいったん抗争を始めたとすれば、そのパートナーシップはなくなってしまうのです。

二二八事件の犠牲者家族は、もう彼女たちの家のことで争われるのを望んではいません。

もし30数年前であれば、「私は二二八犠牲者の遺族です」と言ったら人々は恐れたでしょう。しかし、現在において「私は二二八犠牲者の遺族です」と言ったら、「ええ、本当に？」[といった好意的な反応]となるでしょう。こうしたなかにあって、二二八事件はもはや選挙の時に対抗のために持ち出される〔訳者注：反国民党を目的とした政治抗争の〕テーマとはなり得ないのです。

10. 〈壮烈犠牲〉、あるいは〈忍辱負重〉

二二八事件の記念碑の場所には、一つの琮〔祭祀用の玉器〕があります。真ん中に池が設置され、その池の上に琮があるのです。それは〈外円内方〉〔外には和やかに接し、自身には公正に対処すること〕を示すものであり、古代中国では地鎮のために用いられるものです。二二八事件では、多くの血が地上に流されました。そのため、地鎮が必要になります。この部分についてはまだ整理していませんが、とても大変で困難な作業でした。場所の選定をめぐって多くの戦いが繰り広げられたのです。最後は記念碑のデザインを選び、記念碑の建立となりました。この過程においては、一つ、また一つと、それぞれ段階を踏んで進めていかなければならず、大変な手間がかかりました。これは、単純に「対抗」すれば済むものではありません。もし「対抗」するならば、交渉の余地はなく、ただ怒りに任せてドアを叩きつけ、その場から立ち去らなければいけなくなるからです。

中国語で表現すれば、〈壮烈犠牲〉〔壮烈な犠牲を遂げること〕がより簡単か、あるいは〈忍辱負重〉〔辱めを忍び重きを負うこと〕がより簡単か？ ということです。我々が選んだのは二つ目の道です。我々は耐え抜き、それにより一步、また一步と歩みを進めて解決していったのです。これには多大な心労と肉体的犠牲が伴います。果たして、どちらの道が容易でしょうか？

私が林宗義と共に歩んだのは〈忍辱負重〉の道でした。彼は、1～2カ月に一度カナダから台湾に戻ってきました。この業務のために、彼は1年におよそ8回台湾に戻ってきたのです。この年8回の帰台は何を意味しているのでしょうか？ 台湾に飛行機で飛んでくるということは、1回につき往復のフライトに搭乗するということです。カナダと台湾には8時間の時差があります。体への負担は相当なものです。しかも、彼は70歳を過ぎていました。それを10年間も続けて闘ったのです。そうすると、彼は160回も太平洋を横断する長距離フライトに搭乗したことになります。そうやって、一步、また一步と歩みを進めていったのです。彼が台湾に来るのは〔訳者注：二二八犠牲者として、他の犠牲者遺族のための〕闘いのためであり、私は彼と一緒に闘い続けました。彼が台湾に戻ってこれない時には、私が彼に代わって闘ったのです。

〈反〉することは、言うほど簡単なことではありません。一言何か言えば、それで国民党が消え去るでしょうか？ そんなことがあるはずがありません。国民党は変わらずそこにいて、しかも警察と軍隊を有しているのです。あなたが相手に〈反〉するとして、相手から打

ちのめされる準備はできているのでしょうか？ だからこそ、我々がこの二二八関連の運動を展開させていった時に心がけたことは、毎回平和裏に執り行う、ということです。いつも安全に、安全に、安全に、安全に…毎回は安全でなければいけないのです。もし〈平反〉するとして、あなたはいったい誰とケンカするのでしょうか？ケンカを始めること自体は簡単なことなのです。

11. 平和と和解

平和を求め、和解を求めること、それがいかに困難なことか！ ケンカをするのは簡単です。でも、それでどのように和解のための仕事が進められるというのでしょうか？ 私はあなたの立場に立ち、あなたは私の立場に立つ。国語を話す人々が台湾語を話し、台湾語を話す人々が中国大陸の言葉を話す、ということ。こうした点は、建築デザインの世界では転位(transposition)と呼ぶものです。この方法は、我々の建築デザインにおいて数多く見受けられます。二つが平行で硬直した状態から、その両端を交差させると美しく見せることができますのです。こうした多くの創意や考えが、ブリッジ、囲碁、そして建築デザインのなかの技法として用いられています。専門的知識を必要とする闘いがあり、こうした闘いを、我々は10年近くにわたり続けてきたのです。

宗教の立場から出発し、宗教的動機や宗教的な出発点からいかにして社会の課題を解決していくのか。実際に、宗教は社会に対してより多くの貢献を果たすことができます。韓国には光州事件があったことを我々も知っていますが、しかし、韓国にはカトリックによる後ろ盾があったものの、我々にそれはありませんでした。我々には何も後ろ盾になるものがなかったのです。我々は個人として動いていました。我々を支持してくれる宗教組織はありませんでした。むしろ、我々は宗教組織のなかにあって、とても孤独な存在だったのです。

我々には、翁修恭という牧師がいました。人は、「彼は李登輝の牧師だ」と言いました。ところが、彼は私に、「李登輝は彼の〔記者注：翁修恭の〕教会員である」と言ったのです。李登輝は彼にとっては1人の教会員に過ぎないのであり、決して李登輝に属する牧師ではないのです。ここからも、彼〔翁牧師〕は、あくまで一個人として行動〔記者注：翁修恭の平安礼拝への参加など〕をとっていただけなのです。

我々は神の前では皆個人としての存在になります。「次はカトリックの番」ということは言えないのです。神はこのような審判は下されません。すべてが1人ずつなのです。こうしたことから、我々は神の前では個人としての存在になります。「私がカトリックを代表する」、「私がキリスト教会を代表する」ことはできるのでしょうか？ いいえ、それはありません。あなたはあなた個人なのです。我々は小さい、一個人としての存在です。だからこそ、海老で鯛を釣り、弱きをもって強者に抗す〈以小博大、以弱抗強〉方法が用いられなければならないのです。

とても小さな「二二八家族会」が、なぜ『聯合報』〔記者注：台湾を代表する国民党寄り

の新聞」に報道されたのでしょうか？『聯合報』は基本的に我々とは対立する立場にあるので、『聯合報』が我々の良いことを言うはずがありません。『聯合報』は国民党の側に立つからです。ですが、『聯合報』ですら我々を肯定する報道をしてくれたとしたら、それは我々が非常に肯定される行動をとった、ということを示しています。もしあなたの敵がこぞってあなたを賞賛するならば、それはあなたが非常にうまく仕事をやってみせた、ということを示しているのです。

12. 〈以小博大、以弱抗強〉

私は1975年に読書会に参加したことで学校の教官から目を付けられてしまいました。それによって私は国外に出て学びを深めることができなくなりました。留学ができなくなり、良い仕事にも就くことができなくなってしまったのです。これらのことがあったため、私は絶対に、いかなることがあっても国民党にだけは投票しませんでした。

しかし、こうしたことがあったからといって、国民党の悪口をいたるところで話せば済む、ということになるのでしょうか？ 国民党の悪口を言ったとして、私自身にどれほどメリットがあるのでしょうか？ それに、あなたが悪口を言う前に相手があなたを殺してしまったとしたら、どうでしょう？ それこそ何にもならないのです。

私はこれまで一度たりとも国民党の候補者に投票したことはありません。ですが、だからといって立ち上がって相手とケンカする必要があるのでしょうか？ 私は、クリスチャンがいたるところで相手の悪口を言うべきだとは思いません。そうしたことを私がすべきだとも思いません。そこで、私は民主にとっての五つの原則を把握しました。まずは主体性で、次に主动性です。その後、私は自分で主催し、あなた方を招待します。それが主场性です。続いて、私が主導して、あなたにどうすべきかを教えます。あなたがコマを打つのではなく、私が「この手がより正しい、より良い」と教え、私が主導するのです。民主の時代には、私が主人であり、あなた方政府が公僕なのです〔主僕性〕。

こうした五つの原則を把握したうえで、我々は運動のディスコースを構築する一方、我々の理念を伝え広め、そしてまた、我々の社会資源を蓄積させることで、社会の民心を束ねていきました。こうしたことを積み上げながら、我々は一歩、また一歩と、リズム感をもってテンポ良く「二二八平安運動」を進めていったのです。

13. 「被害者がいるだけで、加害者不在」、「移行期正義」に対する見解

ここでの問題は、加害者と呼ばれる者が、すでにこの世に40年間も放置され続けてきた、ということです。これ以上何ができるのでしょうか？ 今日あなたが権力を手に入れ、地位も手に入れたのなら、これはあなた方が対処すべきことです。キリスト教の信仰に照らしてみた時、こうしたことに我々がかかわることはありません。

私自身、被害者であり、また生存者でもあります。ですが、私はこうも考えるのです。もし、正義というものが移行しなければ存在しないのだとしたら。もし、正義というものが、相手から奪わなければ手に入れないのだとしたら、それはもはや正義と呼ぶべきものなののでしょうか。そもそも、仇討ち〈討公道〉という行為自体を正義〈公道〉と呼ぶことはできません。では、どのようにすれば正義をその手に取り戻すことができるのでしょうか？ しかも、あなたはソフト・エンカウンターといったような手法はとることができません。あなたは、強い立場からの手法をとるべきです。なぜなら、あなたはすでに権力を持ち、権力の座にいるからです。あなたは何でもできるはずですよ？

基本的に、私は過去にブラックリストに載せられてしまったために、公務員が受け取ることのできる毎月の年金といったものは私にはありません。今の蔡英文の政府の手法について、私は完全に同意してはいません。もし私が1匹のネズミを捕まえたいのなら、私は「これからネズミを捕獲します！」と声高にアナウンスする必要はありません。そうでしょうか？ そんなことをしたら、ネズミは隠れてしまい、あなたが捕まえることは難しくなります。

私は「蔡英文政権が掲げる」五大改革には賛成ではある一方、その改革に賛成しない部分もあります。それは例えば、私が語っている平安運動が、必ず〈平反〉と呼ばれなければならない、ということがそうです。〈平反〉が必要だとして、それでは誰に反して、誰を正すべきなのか？ 私の観念としては、次世代のために、若い世代のために、より良い将来を展望するための制度設計こそが必要であり、それを我々にさせてほしいのです。我々は次世代の若者がより良い道を歩むことができるようにしなければなりません。だからこそ、私は改革に加わる必要がないのです。いったい、誰を改め、誰を改革すべきなのでしょう？

改革であれ、〈平反〉であれ、実際にやっているのは、我々が努力した結果をあなた方が活用し、利用しているということです。我々は苦勞し、多くの汗を流しました。私はここ〔胸部〕を29センチも切開したのです。過勞のために、1996年に手術したのです。我々が平穏な日々を送ることは良いことではありませんか？ だから、私は蔡英文が進めていることに対して賛成ではあるけれども、その方法には賛成できないのです。なぜなら、良い事柄に対しては、同じく良い方法が用いられるべきだからです。

二二八平安運動は多くのことを成し遂げました。私が1998年に基金会を離れてから、[2019年の時点で] もう21年が経ちます。この21年間であなた方は色々とできたはずですよ。「被害者がいるだけで、加害者不在」というなら、それは誰が成すべきことでしょうか。誰が加害者を捕まえることができるのでしょうか？ 私はもう引退し、すでにそうした立場からは退きました。

あなた方は、「被害者がいるだけで、加害者不在」と言っている。私はもうこの20年間何者でもありませんし、そのキッチン〈厨房〉にまだ立ち続けているのはあなた方です。あなた方がぜひやってみて、進めてみてください。きっと簡単にできるはずですよ。我々は何もないところから記念碑の建立まで実現させ、基金会も成立させました。その後のことは、もうあなた方がやるべきことなのです。

【補足資料】

彭海瑩（蘇南洲夫人）インタビュー記録

1. 蘇南洲が果たした役割

彭海瑩：

「二二八」は台湾近現代史における最大の悲劇であり、台湾籍と外省籍の人々の間に対立関係を生んだ主な原因でもありました。40年もの長きにわたり、「二二八」はタブーと見なされ、誰もそのことについて語る勇気はありませんでした。南洲が努力したのは、この問題を真に解決して、二二八事件の犠牲者家族が受けた心の傷を癒し、慰めることでした。彼は抗争のためではなく、問題解決のために努力したのです。

「二二八和平日促進会」がとった方法は、社会における全体の雰囲気、政界、そして二二八にかかわる言論の自由を重視させるうえで、大きな助けとなりました。彼らの努力は当然のことながら十分敬服に値するものです。ただ、その仕事は主に“地ならし”であり、その後南洲が“耕耘”の仕事を続けていくこととなりました。土壌が次第に改善されていった状況下において、知恵と戦略を用いながら、二二八事件に関連する問題を一気に解決へと導いていったのです。

2. 真の主体は犠牲者家族

南洲がこれまで強調してきたのは、真の主体が犠牲者家族である、ということです。どのように彼らを慰め、どのように彼らの心に平安を取り戻すことができるのか。これが一番重要なことなのです。これらを通じてこそ、苦難により歪められた心は解放され、社会に平安がもたらされる可能性がようやく出てくるのです。「二二八平安礼拝」は二二八事件にかかわる問題を解決するための転換点となりました。この礼拝が、二二八という問題を、これまでの抗争と対立の状況から、相互に有益な関係性を構築する動きへと転換させることができたようになったのです。

南洲が望んでいるのは「平安」です。人の心を安定させることが必要であり、〈平反〉だけで済む、ということでは決してなく、真に美しい将来へとつなげていかなければなりません。「二二八平安礼拝」を開催した後、社会の雰囲気は一変しました。それ以前は、常に抗争、デモ、対立が続き、そこには多くの群集と鎮圧部隊が動員されていました。ですが、礼拝の後には、創造性にあふれる、平和的な雰囲気へと変わったのです。南洲が望んでいたのは、こうした一連の運動が平安を得て進められることでした。人々は衝突や対立を決して必要とし

ていません。必要としているのは、社会における真の融和と平和なのです。

実際に南洲が尽力した活動にも、〈平反〉の役割と効果がありました。なぜなら、それらの二二八犠牲者家族は、従来「三位一体の敵」〔訳者注：国民党は「台湾独立論者、反国民党政府〈党外〉勢力、中国共産党」の三者を〈三合一敵人〉と呼んだ〕として、暴動を起こした国家の反逆者と見なされていたのです。けれども現在では、彼らは皆、人々から尊敬されるようになりました。そのことから、実質的には〈平反〉の効果があったといえます。しかし、南洲が必要としたのは〈平反〉だけでなく、そこから一歩進んで「平安」を求めたのです。

「二二八平安礼拝」の時に、我々が聖書にある聖句を用いました。その聖句は、「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、〔訳者注：「ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。」エペソ人への手紙2:14-16〕」というものです。台湾人と外省人の間には、本来非常に深い溝があり、非常に高い壁がそびえ立っていました。その原因を作ったのが二二八事件です。我々が望んだのは、「二二八平安運動」によってその高い壁が倒され、双方にとって真の和解と融和が達成されることでした。

3. 林宗義と蘇南洲

南洲が林宗義博士から一つの重要な学びを得ることができました。それは、「現実的な理想主義者」〈務実的理想主義者〉になる、ということです。「現実的」とは、英語では practical です。ただやりたいことをやればいいのではなく、ある理想を掲げて、そこに到達するために具体的な行動をもって目標を達成するのです。もし声ばかり大きく荒げて、問題を解決することができず、出口を見つけることさえできないのなら、それは意味がありません。そのため、彼が望んだのは、やると決めたからにはその目標を必ず達成する、ということでした。

林博士は実際には平安礼拝に参加することはありませんでした。それは、彼が国外にいたからです。彼は、国連の WHO の高官を務めていましたが、国民党のブラックリストに入っていたのです。彼は、平安礼拝の後に南洲と知り合いました。元々、彼は性格的に非常に用心深い人で、簡単には他人を信用しない人でした。ですが、彼は南洲の仕事ぶりを見て、南洲が心から全身全霊で、無条件に奉仕する姿を見るうちに、林博士の態度が変わっていったのです。その後、彼は南洲に対して絶大な信頼を寄せ、南洲と密に連携を取るようになりました。林博士はカナダに戻らなければいけなかったため、台湾には月に1～2回訪れましたが、台湾における実務的な仕事はすべて南洲が対応し、処理しました。

林博士はクリスチャンで、李登輝もクリスチャンでした。ここからも、実際にここには神様の御心が働いていたと感じています。もし神様からの御恵みがなければ、これらの一連の運動はこれほどまで順調に達成されることはなかったのでは、と思います。

現在において、二二八事件はもはやタブーではなくなりました。大部分の問題はすべて解

決されました。賠償、記念碑の建立、謝罪はすでに行われました。真相も多くが公開されましたが、その他の真相については、民進党が長年与党の座にあってもまだ完全には公開されていないようです。もしかすると、何か現実的な問題を考慮してのことかもしれませんが、公文書はすべてが完全に公開されてはいません。

4. 二二八平安運動が目指した道—信仰、愛、慰め

ただ、そうであっても、二二八事件は現在ではかつてのような問題ではもはやなくなりました。なぜなら、すでにほとんどの問題が処理され、解決にいたったからです。犠牲者も、真に名誉回復を果たすことができたといえ、社会的な地位も回復することができ、正当な評価が与えられるようになりました。かつては、犠牲者家族は自身の身分を明かすことができませんでした。ですが、もう彼らは公明正大に人前に出ることができ、以前のように怯える必要もなくなったのです。

南洲が望んだのは、こうした傷ついた心を慰めることでした。そして、それらの罪を犯した人々が正しい道を歩むことができるようにしようとしたのです。神様が南洲を用いてくださったことに感謝します。なぜなら、彼は決して自身の勇敢さや理想だけに頼って行動しなかったからです。彼は、真に知恵を振り絞り、一步一步目標に向かって歩み、達成しました。これはきわめて容易なことではありませんでした。南洲は、信仰に即しながら、本物の愛と真心をもって二二八平安運動を進めていったのです。

南洲によれば、あなた「菅野」が全世界で初めて彼のもとを訪ねた歴史学者だそうですね。あなたが、南洲のこれまでの仕事に対して肯定的な評価を与えてくれた初めての歴史学者にもなってくれたこと、そのことをとても嬉しく思います。

-
- 1 菅野敦志「『現実的理想主義者』と二・二八事件をめぐる和解の試み—林宗義・蘇南洲の役割に着目して」外村大編『和解をめぐる市民運動の取り組み—その課題と意義』明石書店、2022年、201-226頁。
Atsushi Sugano, "The Rehabilitation Movement over the 2.28 Incident under KMT Rule (1987-1997) : Reexamining the transition from confrontation to reconciliation", *Journal of Contemporary East Asia Studies*, Vol.11 Issue1, April 2022, pp.162-181. (<https://doi.org/10.1080/24761028.2022.2067611>)

The “2.28 Shalom Movement” and Social Reconciliation in Taiwan: An Interview with Su Nan-chou and Peng Hai-ying

SUGANO Atsushi

Abstract

This is a report of an interview with Su Nan-chou and Peng Hai-ying, who committed themselves to the promotion of social reconciliation in Taiwan. The aim of this article is to record the trajectory of the rehabilitation movement over the February 28th Incident (2.28 Incident) in Taiwan which began in the late 1980s, with a special focus on the role and accomplishments of Christians without any party affiliation. The initial action to accuse the Chinese Nationalist Party (KMT) and launch a redress campaign against the KMT government was driven by an anti-government movement. Following the establishment of the 228 Peace Day Association in 1987, the “2.28 Justice and Peace Movement” was carried out from 1989. However, the “2.28 Shalom Service” initiated by Su Nan-chou in 1990 opened the initial gate toward reconciliation. The first victims’ family association, the World Alliance for Concerned Citizens and Surviving Victims and Families, was set up by Su together with Lin Tsung-yi. Both played a significant role in transforming the rehabilitation movement from “confrontation” to “reconciliation.” In this report, Su and Peng recall their experiences and memories of how Lin and Su devoted their efforts through their “2.28 Shalom Movement” to achieve maximum results for the social reconciliation in Taiwan. This work was supported by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) KAKENHI Grant-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas (Research in a proposed research area) Grant Number 17H06338.